

(1) ユーチューブ

財津和夫 [+ フォローする](#)

2025年11月1日 2:00 [会員限定記事]

 保存

     

ユーチューブを見るのがやめられない。何を見るかというと、国内外の音楽家が演奏している動画だ。どれを見てもみな素晴らしい。自分にもこんな音楽的才能があったらなあ、こんな音楽的知性があったらなあ、悔しさとジェラシーをつのらせる。

気がついたら2時間も3時間もすぐに過ぎている。時計をちらっと見てあすの予定もあるからそろそろ寝なきゃと床について、さっきまで見ていた映像が頭の中をぐるぐる回り、またジェラシーで意識がさえわたる。まんじりとしめないまま、空が白みはじめることもしばしばだ。



最近の筆者

若い頃なら「追いつき追い越そう」と発奮する材料になるだろう。でもこの歳（とし）になると、自分の実力はよくわかっているし、これから成長できるとも思えない。行き着く先はないのだから、健康にいいわけがない。でもやめられない。ジタバタし続けている。

若い頃の作品を聴き直し、下手だなあと恥ずかしくなることがある。今ならもっと完成度の高いものを作ることはできるだろう。とはいえ若い頃の作品には、無知だからこそ生まれる自信がみなぎっている。ヘタウマであっても、その時代でしか出せない魅力がある。今はないものだ。

50年以上音楽を仕事にすることができて、ラッキーだった。デビュー当時は、バンドのような仕事はせいぜい数年で終わるというのが常識だった。ビートルズに憧れて始めた、既存の歌謡曲と違う「自分で作って歌う」スタイルが続いた理由かもしれない。実力以上に評価され、支持してもらえたという思いがある。

後に詳しく触れるが、私のバンド、チューリップは「私の小さな人生」というシングルレコードでデビューしている。この録音を終えた途端、4人のメンバーのうち2人が脱退したという意味で、「幻のデビュー曲」といわれる作品だが、ここで歌った「死んで行くその日まで/歌を歌って生きて行きたい」という目標には近づいている。

振り返ると、恋愛は別にして、絶対やりたいと思ったことは実現できてきたように思う。遠い未来をイメージしたことはない。せいぜい数日、数カ月先の課題に全力で取り組む日々だった。困難な状況にあっても、目の前の課題をひとつずつ片付けてきたことが今につながっている。

シングルが1枚出せて、「俺の夢はこれで終わっていい」とすら思ったが、バンドを作り直して上京し、今度はアルバムを作るという夢が達成できた。3年くらいはがんばろうと思っていたら、さらに先が開けた。そんな繰り返しが、8年になり、10年になり、やがて50年になった。

今はチューリップ時代に私と二枚看板だった姫野達也とコンサートで全国をめぐる。思い切りわがままに、若い頃に夢中になった海外アーティストらの自分たちが歌いたい曲と、お客さんが聴きたいであろうチューリップの曲を演奏するという構成で、どこでも温かく迎えてくれるのが本当にありがたい。

バンドの崩壊や、信じていた人間からの裏切りなどつらい目にも遭った。病気もしたし、音楽への意欲を失ったこともある。それでも曲を作り、歌うことができてきたのだから、これでよかったのだろう。1カ月間、そんな私の半生をめぐる「心の旅」に読者の皆さんをお連れしたい。

 [「日経文化」のX（旧Twitter）アカウントをチェック](#)

財津和夫 私の履歴書 (2) 青い空

シンガー・ソングライター

財津和夫

+ フォローする

2025年11月2日 2:00 [会員限定記事]

📌 保存

📄 📧 📱 🗑️ 🌐 📌

青い空に浮かぶ黄色いイタチの体。そのコントラストが忘れられない。イタチは放物線を描いてポテッと地面に落ちて息絶える。イタチは、父が庭で飼っていた採卵用の鶏を狙っていたのだろう。私は「殺さないで」と泣き叫んだが、父は容赦なかった。

3歳くらいの頃だと思う。もっとも古い記憶のひとつである。そのときの心の傷のせいだろうか。空の青さは私の中の不安をかき立てるようだ。チューリップの「ブルー・スカイ」など、私の作る歌で、青い空は決まって悲しみと結びついている。

私は1948年2月19日、財津国平とサイ夫婦の五男として福岡市で生まれた。長男、次男は早くに亡くなっていたから、6歳上、4歳上の兄がいる3人兄弟の末っ子として育った。国平は祖父が農場経営で成功した日本統治下の朝鮮で育ったが、敗戦後は一転、着のみ着のままで引き揚げ、親戚を頼って福岡に落ち着いたという。



両親と

福岡で父が得た仕事は、貝塚という地域の農場開拓だった。引き揚げ者の雇用対策で作られたものらしい。私の記憶にあるのは貝塚での2つ目の家で、主食のイモ類のほか、小さな果樹園もあった。鶏のほかには食肉として出荷する豚も飼っていた。

近隣の米軍基地からドラム缶に残飯をもらってきて、オート三輪で運んできて豚に食わせていた。肉質を良くするために去勢する様子も目にした。その際の「ウギャー」というような、なんともいえない叫び声が忘れられない。

私がものごころついたころには、家の近くに競輪場があり、母は場内で食堂を営んでいた。父が最初に開拓した貝塚の土地に50年に競輪場が開業することになり、土地買収の見返りで、食堂の営業権を得られたようだ。

定食やうどん、そば、巻きずしに酒類と、食卓に上るものならなんでも売っているような食堂だった。車券が当たれば客は気が大きくなるし、外れればやけ酒にやけ食い。いずれにしろ食堂の売り上げにつながるので、なかなかいい商売だったようだ。

はじめは競輪場の門から中には入れてもらえなかったのだが、いつごろからか手伝いと称して食堂に入り浸るようになる。シャツシャツとうどんの湯切りをするのが好きだった。競輪場では日がなマーチが流れていて、おもだった曲はすべて覚えてしまった。音楽との最初の出会いだ。

母の食堂経営が軌道に乗ると、父は髪結いの亭主よろしく食堂の片隅に陣取って、予想紙を片手に次のレースを検討するという暮らしぶりになった。私に数字を走り書きした紙を渡して、「車券を買ってこい」と言う。この瞬間が好きだった。父との数少ない接点だったからだ。父とはあまり心を通い合わせたこともなかったが、後年、母が何度もしてくれた話がある。

引き揚げてすぐの頃、栽培していたイモ類がいつもなくなるので、ある夜、父が見張りをした。そうしたら案の定泥棒がやってきて、捕まえたのだという。父が説教をしたところ、その泥棒は子供に食べさせるものがないという。

それを聞いた父は、彼が盗もうとした倍ほどのイモを持って帰らせたとか。母は、うちにも食べるものがなかったのに、とぶつくさ言いながらも、父のその優しさにまんざらでもないようだった。

財津和夫 私の履歴書 (3) 音楽を仕事に

シンガー・ソングライター

財津和夫 [+フォローする](#)

2025年11月3日 2:00 [会員限定記事]

保存

「勉強はやめて早よ寝んしゃい」。小学校に上がって、夜宿題などをしていると、決まって母にこう言われた。世間で母親は「勉強しろ」とガミガミ言うものだという常識はあったから、変わった親だなあと思っていた。上の子2人を幼くして亡くしているので、未っ子に無理をさせたくなかったのかもしれない。

最初に入ったのは福岡市立箱崎小学校。学校帰りに大縄跳びで遊んだりしたけれど、貝塚の家から路面電車で数駅離れていたの、近くに住む級友もいない。一人で入り江に行き、海に飛び込んだり、浮かんでいる材木の上に乗ったりして遊んだ。玄界灘の海景が友達だった。



母が営んだ食堂で。左手前が筆者（1954年）

小学生のころから、ラジオで歌謡曲はよく聴いた。春日八郎、三橋美智也、もう少し前の時代の灰田勝彦や終戦直後の美空ひばりの歌などをものまねした。プラスバンドに入った兄が聴くエルビス・プレスリーや、映画音楽も聴いた。映画音楽がヒットチャートの上位に入る時代だった。

毎週楽しみにしていたのは「風雲黒潮丸」というラジオの冒険活劇だ。主題歌に「風にはためく三角帆」という歌詞があって、意味もわからず「さんかくほー」と歌っていた。登場人物のまねをして、一人でチャンバラごっこもした。「やられたー」と斬られ役を演じるのが楽しかった。

小学校時代も立ち退きで引っ越しをすることがあり、馬出（まいだし）小学校、名島小学校と2度転校している。小学校が変わるたびに、授業の進行度合いが違うので、ついていけないことが多かった。母の手前、家で勉強もできず、成績はずっと低空飛行だった。

ようやく友達ができたのは、高学年で転校した名島小学校でのことだ。担任がえこひいきする先生で、私は義憤を感じていた。テストの時間、先生とかわいがっている生徒が符丁で答え合わせをしている。「先生がそげんこととしてよかとですか」とつい大声で言ってしまった。以来、先生からは目の敵にされ、何かというと「廊下に立つとりんしゃい」とやられた。私に同調した友達は巻き込まれたようなもので、2人で反抗してはさらに嫌われていた。

具体的なイメージはなかったけれど、このころから将来は音楽を仕事にしたいという思いは芽生えていた。歌うことはやはり好きだったのだ。

進学した福岡市立多々良中学校の音楽の授業で、作曲してみようという日があった。先生が黒板に「きれいな花がたくさん咲いた」という歌詞を書いて、「きれいな花が」までのメロディーを先生が作り、「たくさん咲いた」の部分を生徒に書かせる。先生が4つほどの作品を選んで黒板に書き講評したのだが、その中に私のものがあった。

変わったことをやって目立ってやろうと思い、すべて同じ音にしたのだ。「ようできた」という評価ではなかったけれど、「こげんのも面白かね」と言われて、狙い通りというか、してやったりという快感を味わった。初めて作ったメロディーである。

中学時代、競輪場の廃止に伴って母の食堂も閉めることになり、母は海水浴場で海の家を始めた。だが、そこもほどなく埋め立てられ、財津家は安定した収入を失った。台所にいる母に「ピアノは習いたかばい」と言ったことがある。母は振り向きもしなかった。貧乏だからな、と私もそれ以上何も言えなかった。

[「日経文化」のX（旧Twitter）アカウントをチェック](#)

財津和夫 私の履歴書 (4) 平常心

シンガー・ソングライター

財津和夫

+ フォローする

2025年11月4日 2:00 [会員限定記事]



小学生の頃は自分は足が速いと思っていたし、運動も得意だと思っていた。けれど中学に入学した際の体力テストで走ったら、クラスでビリだった。それでも身長が高かったのので、バスケットボール部に入った。準レギュラー、まあ補欠である。選手として特筆すべきことはなかったが、ひとついいことがあった。

当時の中学でバスケ部の顧問は「殴り役」のような役目を果たしていた。朝礼などで態度の悪い生徒がいると、見せしめのように殴るのだ。一方で、彼にとって大切なバスケ部員は殴られない。あるとき、殴られて歯が折れた生徒がいた。バスケ部で本当にラッキーだったと思った。



中学入学を控えて。右端が筆者

そんな处世術を身につけつつも、小学生のときに芽生えた正義感のようなものは中学でも健在だった。誰かを特別扱いする教師には反感を抱いていた。ところが、その特別扱いの順番が自分に回ってきた。国語の教師から職員室に呼ばれて、「君、ちょっとこん問題解いてごらん」と。「来た来た」という感じだ。

私に見込みがあったのかもしれないが、「こりゃいかん」と、ぷいとそこから立ち去った。今にして思えば、正義感ばかりでなく、本当はかわいがられたいという心の裏返しで、嫌われるような態度を取ったのかもしれない。過度に期待すると裏切られるから、自分が傷つかないように。

年の離れた兄2人の下にいて、幼い頃から我慢するのが習い性になっていた。自分の思い通りになることなどないというのが当たり前だった。両親は放任だったが、ひどく叱られることもある。無性に悲しかったあるとき、自分の顔を池に映してみた。泣きべそをかいていた。ふと思い立ち、無理に笑ってみた。あれ、気分が変わるぞ。

こうすればいいんだ。苦しいときには泣き顔をしているんだから、普段の顔に戻せば、平常心に戻るという理屈を自分に植え付けた。以来、それが私の生きる手段となった。悲しんでいても何も変わらないと歌う「もう笑わなくっちゃ」というチューリップの曲は、そんな経験が反映しているかもしれない。

異性に心がざわつくという経験はもちろんしてきたけれど、自分で初恋の相手と「認定」しているのは中学2年のときの隣のクラス的女子だ。会話したことはなく、声すら聞いたこともない。セーラー服の背中に垂らしたカラーがいつもピンと伸びていて、その清潔感が魅力だった。

結局一度も話すことすらなく、卒業式の日を迎えた。もう会えなくなるからと、思い切って手紙を書き、式の後に彼女を追いかけて渡した。彼女も海の近くに住んでいるのは知っていた。海岸のどこそで待っているから何時に来てほしいと書いた。

でも、待てど暮らせど彼女はこなかった。海岸にある土管に座って沈む夕日を眺めながら、すごく悲しかった。思い出すたびについ昨日の出来事のようによみがえる。だから今も、夕日を見ると悲しみが込み上げる。歌にはなっていないと思うけれど。

この話には後日談がある。2日後くらいだったか、兄が「手紙が届いとったばい」と言う。彼女が自宅に届けて兄が受け取ったらしい。「兄ん責任で中身は確認した」とも。「行けません」と書いてあった。勝手に開封した兄には腹を立てたが、結果は同じだったのがせめてもの救いか。

財津和夫 私の履歴書 (5) 高校生活

シンガー・ソングライター

財津和夫 +フォローする

2025年11月5日 2:00 [会員限定記事]



「和夫、ちょっと起きて。なんか髪ん長か人たちが大人気だって」。中学3年のある日曜日だったと思う。朝の苦手な私が昼ごろまで眠りこけていたら母にたたき起こされた。外国のニュースを紹介するテレビ番組で、ビートルズが英国で大ヒットしていると伝えていた。当時、母は電機メーカーの社員寮で寮母のような仕事をしていて、両親と私もそこに住んでいたからテレビがあったのだ。

このとき初めてビートルズに接した。客が騒いでいるばかりで曲もちゃんと聞こえない。番組も何か奇妙なものという紹介の仕方で、私も「汚らしいなあ」という感想しかなかった。小学校高学年の頃から、在日米軍人向けラジオのFENでポール・アンカなどを聞きかじっていた。アメリカンポップスの明るく爽やかな世界が身についていた私は、それ以来、ビートルズを避けるようになる。

この頃、私は兄にねだってギターを買ってもらった。ナイロン弦の安物で、弦がものすごく高く押さえるのに力がいる。教則本を見ながら、藤山一郎が歌った「平城山（ならやま）」をボロンと爪弾くくらい。弾きにくい上にすぐ指が痛くなるので、夢中になって練習するようなこともなかった。



先生に「無理」と言われた普通科に合格した

受験の季節が近づき、進路相談で、福岡県立香椎高校を志望すると先生に伝えた。当時の成績は「下の上」くらい。先生は言下に「無理や」といい、工業高校を薦める。だが私はどうしても普通科に行きたかった。受験したらたまたま知っていた問題がいくつか出て、運良く合格した。

高校ではブラスバンド同好会に入った。担当はアルトホルンで、リズムをとる役目だ。マーチは競輪場で覚えていたので簡単だった。1年生のときの文化祭で演奏することになり、先輩が「指揮ばやれ」という。「できません」と言ったら「俺たちが勝手に演奏するけん合わせろ」と。主客転倒だが、アルトホルン、吹きたかったなあ.....。

この文化祭では忘れられない出来事がある。倉庫に楽器を片付けに行った際、弓矢や刀などがあった。演劇部のものかと思って弓を手にとって、長い廊下に出て何気なく引いてみたら、カラカラッと何か部品が飛んでいった。探したが見つからない。まあいいか、と帰宅した。

翌朝登校したら、同好会の先輩が血相を変えて飛んできた。「先生が呼んどお。いたい何ばやったんや」。慌てて職員室に行くと、担任の先生が出てきた。「何てことばしてくれたんや!」。先生はわなわな震えている。

先生によると、私が壊した弓は元寇（げんこう）の際に使われた文化財で、社会研究部が文化祭で展示するために筥崎宮（はこざきぐう）という神社から借りたものらしい。先生は「すぐに謝りに行け」という。生きた心地もしないまま筥崎宮に出向いて宮司さんに経緯を説明し、謝罪した。すると宮司さんは「あれは模造品やけん大丈夫」と事もなげに言う。このときほどほっとしたことはない。

期末試験のときだったか、社員寮の空き部屋で勉強していたら、社員から苦情があった。家族3人が暮らす部屋は3畳一間で、とても勉強できる環境ではない。自宅に居場所もなくなり、友人の家を転々とするようになった。そんな暮らしの中で、人生を一変させる出来事に遭遇する。

ビートルズとの再会だ。

財津和夫 私の履歴書 (6) ビートルズ

シンガー・ソングライター

財津和夫 [+ フォローする](#)

2025年11月6日 2:00 [会員限定記事]

 保存

     

福岡県立香椎高校2年生だった1964年8月、「ビートルズがやって来るヤァ!ヤァ!ヤァ!」が日本で公開された。映画館に行ったのは真夏という記憶がないから、福岡での公開は東京より遅かったのかもしれない。悪友から誘われた。

私にとって、ビートルズのイメージは「なんだか汚らしい」だったし、エレキギターを持つのは不良といわれた時代。「興味なか」と断ったが、悪友が「映画館はきっと女の子でいっぱいだよ」と言いつのる。出会いがあるかも。それなら、という下心で映画館に足を運んだ。



指を痛くしながらギターを弾いて歌った

ところが一瞬で歌と音楽のとりこになった。音楽的な教養はなかったから、どこに魅力を感じたのかはうまく説明できない。英国的というのだろうか、それまで知っていた加山雄三らが出演する青春映画の健全な明るさやドタバタのコメディーとは違う、ブラックな笑いや少し影のあるサウンドにひかれた。

映画館を出ても「シー・ラヴズ・ユー」「キャント・バイ・ミー・ラヴ」といった曲が頭の中で鳴り続けていた。いつでも聴けるようにする方法はないか。思い悩む暇もなく、ほどなくラジオはビートルズばかりが流れるという状況になった。後にチューリップを結成することになる同級生の吉田彰とは、ビートルズを介して親しくなった。

吉田がオープンリールのテープデッキを持っていたので、デッキごと借りて聴いたり、たまに帰宅すると電蓄でソノシートを聴いたり。ビートルズ一色の生活になった。当然自分でも演奏したくなるが、兄にもらったナイロン弦のギターしかない。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」など、アコースティックな曲を指を痛くしながら練習した。

高校の近くに香椎宮という神社があって、クスノキの並木道があった。ここで、吉田彰と一緒にビートルズの曲をハモったりしながら、毎日登下校していた。今ならまずはコピーバンドを作るのかもしれないが、楽器がなくてもできるのは声のハーモニーだから、こればかり練習した。

楽器を持っているやつがないかと、学校にバンドのメンバー募集の張り紙をしたこともあるが、反応がない。ビートルズの演奏を再現できないもどかしさがつのり、いきなりオリジナル曲を作り始めた。当時、NHKに「あなたのメロディー」というテレビ番組があった。アマチュアが曲を投稿し、優秀作はプロがアレンジして歌うのだ。

投稿した曲はいまもいくつか覚えている。恥ずかしい出来の曲ばかりだ。何度投稿してもなしのつぶてだったが、ビートルズとは全く違って、いかにもNHKで採用されそうな、日本的な青春歌謡ばかりを狙って作っていた。私なりのマーケティングだった。

その頃に作った「並木道」という曲がある。吉田と歩いた並木道を念頭に作った恋愛ソングである。卒業生を送る予餞（よせん）会で、在校生が何かやれということになり、吉田と2人でギターを弾き、私が歌った。聴衆は1000人ほどいたと思うが、夢中だったので反応も覚えていない。

財津和夫 私の履歴書 (7) 武道館

シンガー・ソングライター

財津和夫 + フォローする

2025年11月7日 2:00 [会員限定記事]

🔖 保存

📄 📧 📷 📺 📱 📌

高校3年生になって、周囲は受験の準備で忙しくなった。私は母から「和夫は大学には行かんでよか」とずっと言われていたから、特にやることもなくぶらぶらしていた。夕飯のおかずがマヨネーズだけとか、そんな家計の状況だったので、私自身、はなからあきらめていた。

不思議なことに、そんな家であっても、「家計を支えるために就職しろ」などと言われたことはない。貧しいなりに息子には好きな生き方をさせてやろうと思っていたのだろうか。私自身、音楽で生きていくという思いは常に頭にあったから、就職すれば夢が終わってしまうと思いながら、ぼんやり暮らしていた。



ビートルズがすぐそばで歌っているように感じた（1966年6月、日本武道館）＝共同

1966年、高校卒業後の日課はパチンコ

だ。日がな台の前に座り、景品でビートルズのレコードを手に入れもした。さすがに時間ももたないないので、アルバイトを募集していたレコード店に面接に行き、「音楽の道に進みたい。稼いでピアノを習いたい」と言ったら、店主に「いまさら遅い」と言われ、頭にきてこちらから断ったりした。

その夏ビートルズが来日公演することは知っていたが、見るのはとても無理だと思っていた。ところが、高校時代の女友だちから「財津君、ビートルズ好いとったよね」と連絡があったのだ。彼女は誰かにチケットをもらったようだが、自分は興味がなかったのだろう。今でこそ、ビートルズの来日に日本中が熱狂したような伝説が流布しているが、「あんなの騒音だ」という識者も少なくなかった。

兄に旅行費用を借りて、げた履きのまま夜行列車に乗った。東京では兄の友人の下宿に泊めてもらい、日本武道館に向かった。3階席の後ろの方で、ビートルズは豆粒のようにしか見えない。音響も今にして思えばたいしたものではなかったと思う。それでも、すぐそばで歌っているように感じる。これが生演奏か。その魅力に触れた。

女性ファンは騒いでいたけれど、私はどこか冷静に見ていた。どんなふうにもハーモニーを効かせるか、観客を乗せるにはどうするか。そんな観点で、大きな刺激を受けた。ゆくゆくは、自分のオリジナル曲をレコードにしたい、という思いがあったからだ。

レコードを聴く姿勢も、分析的になっていた。ところが、私にとってビートルズはチヨウチヨウのようなもので、1枚のアルバムを聴き込んで「つかまえた」と思ったら、次のアルバムでは全然違うスタイルに変貌し、逃げていってしまう。追いかけても追いかけても捕まえられない。

最先端の楽器を使って、次から次へと聴いたこともない音を出してくる。十分お金を稼いで、悠々自適でもいいはずなのに、攻めの姿勢は揺るがない。それでいて決してきれいにまとまらない。どこかヘタウマ的なざらついた手触りがあった。同時代にすぐれた音楽家はたくさんいたはずだが、私にとってはそうしたビートルズの姿勢とサウンドが、代えがたい魅力だった。

ドラムのこの硬い音はどんなふうに出すんだろうといった具合で、ミュージシャンというよりは、エンジニアのような視点でビートルズの音楽に触れていたと思う。どれだけ分析しても、楽器がないから、再現することもできなかったのだが、コンサートを見たことで「ビートルズみたいになりたい」という夢が芽生えた。

財津和夫 私の履歴書 (8) 大学

シンガー・ソングライター

財津和夫

+ フォローする

2025年11月8日 2:00 [会員限定記事]

📌 保存

🖨️ 📧 📱 🗑️ 🌐 📌

「ビートルズみたいになりたい」という夢は芽生えたものの、方法論もなく無為な日々を送っていたある日、高校の同級生だった女の子とばったり出会った。「財津君、受験勉強しとうと?」「いや、大学には行かんけん、パチンコとか」「本当は大学に行きたかったやろう?」

高校の同級生の吉田彰らは進学していたし、本音をいえば大学生になればバンドをできるという思いもあった。「そりゃそうやけど.....お金が」「何言いようと。合格さえすりゃ親はなんとかしてくれるもんよ」。そういうものか、女子は大人だなと背中を押され、受験を決意した。



校舎はバリケードで封鎖された（1968年1月）＝西南学院史資料センター提供

まずは勉強の環境を整えなければと、兄に援助してもらい実家近くに下宿を借りた。4畳半でカビだらけの部屋だったが、「ああ、ようやく俺の部屋ができたか」と舞い上がってしまった。女友達を呼ぶ日々が始まった。当時のことだから、お茶を飲んでお菓子を食べてという程度。それでも、こちらは下心にあふれているから、向き合っている間は心臓がドクンドクン止まらない。勉強どころではないのは言うまでもない。

そんなわけで、ろくに勉強もしないまま、受験シーズンを迎えた。第1志望は西南学院大学法学部。法律に興味があったわけではない。私が受験する1967年に新設されることになった学部で、実績のないところなら入りやすいだろうという選択だった。

長文を読んで空欄を埋める英語の試験。まったくわからない。問題用紙の上で鉛筆を転がして、芯の先が指した「easy」という単語を書いた。日本史では仏教の問題が出て、たまたま興味があり知っていたつもりだった。自信たっぷりに答案を書いたのに、答え合わせをしたら空海と最澄が逆だったということもあった。それでも不思議なことに、受かってしまった。

「母ちゃん、俺受かったっちゃ、大学」「あ、そう」「入学金がいるっちゃけど」「そげなもんなか」。親がなんとかしてくれるということはなかった。そもそも私は受験することすら親に伝えていなかった。「話が違う」と思いつつ、兄や友人に借りて入学金と授業料を工面した。

入学したのはバンドを始めるためだ。ろくに授業も出ず仲間探しに取りかかった。といっても、当時はカレッジフォークの全盛期。学内にはフォークグループばかりで、ロックのかけらもない。それでもどこかに潜り込もうと思った矢先、「ベース募集」という張り紙が目についた。

「ベースやるばい。持っとらんばってん」。リーダーの田中孝二君に連絡して、加入が決まった。確かもう一人のメンバーの山本良樹君がウッドベースを買ってくれた。HBFという名のグループである。1年も続かなかったと思う。さまざまなグループが離合集散を繰り返していた。

入学してほどなく、学園紛争の波が西南学院大にも押し寄せてきた。私自身は「そんなことで世の中変わるかね」と冷めていたが、ある日大学に行ったら、校門がバリケードで封鎖されていた。そこにいた運動家の級友が「財津、きょうはここで泊まれ」という。私を仲間に入れようというのだ。もともと私はノンポリだったが、その件でさらに彼らとの距離が広がった。それ以来、大学に寄りつくこともなくなった。

財津和夫 私の履歴書 (9) コンテスト

シンガー・ソングライター

財津和夫 [+ フォローする](#)

2025年11月9日 2:00 [会員限定記事]

 保存

     

「うわ。こりゃだめだ。俺たち3位ばい」。1969年11月、東京・新宿の東京厚生年金会館。第3回全日本ライト・ミュージック・コンテスト (LMC) が開かれていた。自分たちの出番の前に外の空気を吸いに行こうと、楽屋口のドアを開けたら2つのグループが練習していた。どちらも驚くほどうまい。

赤い鳥とオフコース（当時の表記はジ・オフ？コース）だ。特にオフコースのうまさには感動した。小田和正さんとの出会いだ。結果は「竹田の子守唄」を歌った赤い鳥がフォーク部門1位で、オフコースが2位。私たちフォーシンガーズは6位にとどまった。赤い鳥は翌年デビューしたが、私たちにとってデビューなど夢のまた夢だった。



「金比羅舟々」が収録された第3回LMCの実況録音盤

フォーシンガーズはHBFで一緒だった田中孝二君をリーダーに、末広信幸君、それに高校時代の同級生の吉田彰の4人組だった。田中君の好きなキングストン・トリオや、ブラザーズ・フォーのようなコーラスグループだ。

コンテストでは讃岐民謡の「金比羅舟々」をアメリカンフォーク風にアレンジして歌った。「追い手に帆かけてシュラシュシュ」というおなじみの歌に、反復しながら変化していくコーラスを重ねた。自信满满だったが、こちらが打ちのめされた。

大学にも寄りつかないままだったから、卒業して就職するという展望もない。いよいよビートルズのようなバンドを作る時期だと、コンテストを終えて程なくフォーシンガーズを解散し、チューリップを結成した。メンバーは私のほか、吉田、末広君に加え宗田慎二君の4人だ。

当時の福岡で8ビートをたたけるドラマーが見つからず、吉田のベースと、3人がギターを弾いて歌う編成だ。自作曲を歌う点で「ビートルズみたい」ではあった。バンド名はビートルズの会社「アップル」にちなんだものを考えたが、ふとオランダの風車とチューリップ畑の風景が頭に浮かんだ。「プ」しか共通していないが、まあいいか。

ターゲットをLMCに絞り猛練習した。楽器の編成は限られているから、コーラスの練習が主体となる。どんな音を重ねるかはもちろんだが、声の音量のバランスに気を配った。当時は1人ずつのマイクなどないから、1本のマイクからの距離の取り方で、美しいバランスを探るのだ。

そして70年のLMC。オリジナル曲「柱時計が10時半」で九州大会を勝ち抜いた。九州大会に審査員として来ていた作曲家の中村八大さんに、もともとは予定になかった「作曲賞」もいただいた。優勝間違いなしだと自信たっぷりでも全国大会に臨んだが、それでも2位止まりだった。

このとき、1位になったグループは規定時間を超えて演奏していた。事務局に猛抗議したが、軽くあしらわれた。悔しさが収まらず、福岡に戻って、全国紙の記者に不正を記事にしてほしいと訴えた。記者はじっくり話を聞いてくれたが、それ以降連絡はなかった。大人の世界の裏側を垣間見た思いがした。

コンテスト優勝を絶対的な目標として猛練習を重ねたのに、実力以外の要素ではねられたと感じた。路線を変更することにした。福岡で人気を確立し、東京のレコード会社が「うちと契約してくれ」と列をなして頭を下げる。そんなバンドになってやろう。

財津和夫 私の履歴書 (10) 私の小さな人生

シンガー・ソングライター

財津和夫 [+ フォローする](#)

2025年11月11日 2:00 [会員限定記事]

保存

プロの音楽家になろうと決意はしたものの、もちろんなれる保証はない。私は楽観的な方だと思うが、将来への不安もやはりあった。その日も、当時よく入り浸っていた、後にチューリップのメンバーになる安部俊幸の家にタクシーで向かいながら、なんとなく気分は塞いでいた。

「キミはギターを弾くとね?」。座席に置いたケースを見て運転手さんが話しかけてきた。「僕も若い頃はギター弾いて歌いよったよ。ぼってん、諦めたと。生活せないかんけんね……。キミは好きなことば続けた方がいいよ。私はできんやっただけ……」

この言葉が安部の家に着いても頭を離れず、深夜にもかかわらずケースからギターを取り出して曲作りを始めた。「私が今日まで生きてきて/何がこの手に残ったろう」。メロディーと歌詞がほぼ同時に浮かんできた。そして死ぬ日まで歌をうたって生きたいと締める。たった2人の車内で運転手さんが語ってくれた言葉が、私の力になった。



自主制作した「柱時計が10時半」

1970年代、九州朝日放送（当時、KBC）ディレクターの岸川均さんが、「歌え若者」というラジオ番組を制作していた。チューリップや武田鉄矢率いる海援隊、甲斐バンドや後にARBを結成する石橋凌らが世に出る後押しをした、福岡の音楽シーンの仕掛け人といえる人だ。

チューリップもこの番組にたびたび呼ばれ、トークや演奏をした。番組に出演するアマチュアたちが福岡フォーク組合という団体をつくって、ホールを借りて自主コンサートもよく開いた。番組の効果もあって、結構な動員があり、チューリップも福岡では知られた存在になっていた。

70年11月には、のちに福岡の音楽文化の発信地と評されることになるライブ喫茶「照和」が天神に開業する。チューリップも常連の出演者となり、お客さんが入りきれないこともしばしばあった。わずかな出演料に、食パンとソーダ水が出るだけだったが、閉店後の店内で好きなだけ練習できるのがありがたかった。

そんな頃、地元の音楽好きのお金持ちがレコードを出す費用を出してくれるという話があり、飛びついた。今というインディーズである。岸川さんに頼んで、KBCのスタジオで録音した。当時、同局にはステレオ録音できる設備がなく、モノラルのスタジオを2つつないだ記憶がある。

コンテストで2位に終わった「柱時計が10時半」をリード曲にした4曲入りのレコードだ。正確には覚えていないが、1000枚くらいは売れたはずだ。なかなかの数字だったということは、東京のいくつかのレコード会社から接触があったから間違いない。

私のもくろみでは、レコード会社を競わせ、最も高い金額を提示した会社と契約するはずだった。だが、メンバーの宗田慎二君が、親戚のいる東芝音工（当時）でないと嫌だという。芸能界はうさんくさいから、親戚の会社が安心という理屈だった。渋々承諾せざるを得なかった。

宗田君のコネが強力だったのか、すんなり話が進み、チューリップはデビュー曲「私の小さな人生」をレコーディングすることになる。タクシーの運転手さんの話を聞いて、安部の家で一気に書き下ろした曲である。私自身の「小さな人生」がここから始まる。このときはそう思っていた。